

ブヴァールとペキュシェの哲学

—— デカルトの戯画 ——

三原 智子
教育学部英語教育講座
(2010年9月24日受理)

La philosophie de Bouvard et Pécuchet

—— le caricature de Decartes ——

Tomoko MIHARA

Faculté de l'éducation, département d'anglais

(Accepted on September 24th, 2010)

序

ギュスターブ・フローベールの遺作『ブヴァールとペキュシェ』は「哲学小説 (roman philosophique)」と呼ばれる。フローベール本人はむしろ、彼の同時代人や後世の批評家もこの形容を当たり前のように使っている。これは、古くはヴォルテールの『カンディード』やサンドの小説につけられた呼称であり、新しいところでは、サルトルの『嘔吐』やカミュの『異邦人』にもこの名が与えられている。これらの作品に共通するのは、作者が小説という形式をかりて、自分自身の哲学を開示している点である。ヴォルテールの『カンディード』の場合は、絶対王政批判であり、サンドの場合は初期の社会主義思想であり、サルトルの場合は、実存主義思想である。しかし、フローベールの場合、彼自身の哲学が明白ではない。

書簡を見る限り、フローベールが『ブヴァールとペキュシェ』において、自分の思想を表明しているのは確かだと思われる。彼は手紙の中で、「[この小説において] 僕はようやく自分の考え方を述べることができる」と告げている。別の手紙では、「いくつかの真実を表明したい」とも言っている¹⁾。しかし同

時に、小説の中で主人公に作者の意見を代弁させたり、ストーリー展開に作者の思想を反映させたりすることは、フローベールが最も嫌うところだった。たとえば、ある書簡においては、つぎのように述べて、作品中に自分自身を表出させることを戒めている。

なぜあなたはご自分の名において話すのですか？なぜ省察を行うのですか、物語の流れを切ってしまうのに？私は、「読者よ、われらの主人公は……」というような発言は好きではありません²⁾。

彼はまた、「小説家には、何事についてであれ、自分の意見を表明する権利はないとさえ私は思うのです」とも言っている³⁾。

そもそも、フローベールは「結論すること (conclure)」を嫌悪する作家である。彼にとって、ある事件や事象について結論を引き出すことは、おうおうにして偏屈な姿勢に凝り固まり、柔軟性を失うことにつながった。「愚劣さとは、結論づけたがることにある」、と彼はしばしば述べている⁴⁾。書簡の中でも、個々の事件について憤りや悲しみなどを述べるもの

の、彼が自分の意見を体系立てて述べることはない。

実際、哲学小説とはいうものの、『ブヴァールとペキュシェ』の中に表明されているはずの「哲学」は曖昧模糊として、一読した限りでは分からない。フローベールはできる限りさりげなく、自身の「哲学」を表明しているのである。隠しつつ、表している、と言ってもよい。本稿の目的はこの「哲学」の一端を明かすことである。

1. つかみがたい現実

『ブヴァールとペキュシェ』は移住をめぐる物語である。ふたりのパリジャンが、奇跡的に大金を手にし、田舎に地主として引っ越すことになる。都会人が田舎で農業を始める、という設定からすでに、波乱を予感させる幕開けである。

もともと、彼らのパリ生活は規則正しいものだった。波風立たず、きまりきったルーティーンに従い、複雑怪奇なものは何もない。二人は書記（コピースト）として定職をもち、家もあり、少ないながら友人もいて、安定した生活を送っている。ペキュシェは独身で、ブヴァールは妻を亡くしたひとり身である。日々は当たり前のようにすぎ、今日は昨日のコピーにすぎず、明日もまた今日のコピーのようにやってくる。パリの「現実」は、彼らの手中の中にあっただけでよい。彼らはパリ生活を完全に「掴んで」いたのだ。しかし、テキストの冒頭、この魂の双子たちが偶然に出会うことによって、きまりきった日々は終わりを告げる。

この出会いがいかに奇跡的であったかについては、いまさら詳しい説明は必要あるまい。偶然、夏のパリで同じベンチに座った二人は、共に、コピーストであり、同じ年齢であり、共に帽子の裏に名前を書いてきた。彼らの体格と性格は正反対であり、一人は太っていて、もう一人は痩せがた。一人は明るくおおらかな性格で、もう一人は暗く物事を突き詰めて考えるたちである。二人はこの違いゆえに、互いにひきつけられる。互いに補い合うといってもよい。この出会いによって彼らは変化し、やがて、ブヴァールの遺産相続をきっかけに、ノルマン

ディーの田舎、シャヴィニヨールに引っ越すことになる。

*

彼らの新居は、家と果樹園、畑、広大な麦畑からなっていた。それまで一度も作物を育てたことがないにもかかわらず、彼らは小作人の助けを借りずに、農業を営む決意をする。ふたりは成功した農場経営者になった自分を、すでに思い描いてさえいる。しかし、恐ろしい事実がしだいに明らかになっていく。彼らは、世界というものは捕えがたいということを知るようになるのだ。先にもふれたように、パリ時代には、世界は秩序立っていて、すべての出来事は想定内に収まっていた。彼らはすでに出来上がった規則に則って、しかも、その規則を体得しているがゆえに意識することもなく、行動していた。だが、シャヴィニヨールでは、彼らは規則をまったく知らない。ルールが見えない世界に彼らは投げ込まれたのである。したがって、すべての出来事が彼らを心から驚愕させることになる (p.87)。象徴的なのは、彼らの作る作物が規格外の化け物ばかりであることだ。

キャベツが一個花開き、伸び、並はずれたものになってきたが、絶対に食べられない様子だった。かまひやしない！ペキュシェはモンスターを持っていることに満足していた⁵⁾。

実は、彼がある植物を別の異なる種の植物の近くで育てたため[...]、忌まわしいあいのこができあがったのだ。(p.87)

野菜も果物も規格外れのモンスターになり、結局、ペキュシェの畑は「アナキー (anarchie)」が支配するものになってしまう。規則などはどこにもない。野菜はすべて失敗し、小麦は堆肥の匂いがついて臭く、ヒツジは死に、嵐のせいで梨はぶつかり合って落ちてしまう。原因不明の火事が起こり、彼らの収穫物はすべて灰になってしまう。瓶詰めトマトや豆は腐り、缶詰にした肉は痛み、ポタージュスープ

からはキノコが生え、耐えがたい異臭を発する。最後には、ガラス管が爆発し、台所がめっちゃめっちゃになってしまう。まったくのカオスである。

ルールを知らない彼らが行くところどこでも、カオスは発生する。そして、このようなカオスに直面するたびに、ブヴァールとペキュシェは秩序を取り戻そうと試みる。世界をもう一度把握しようとするのだ。そのために、彼らはふたつの方法を用いる。「分類」と「規則」探しである。

2. 分類

われわれはテキストにおいて、主人公たちが分類作業を行う現場に、何度も遭遇する。彼らは作物を、雲を、庭の様式を区分し、名前をつける。われわれの考えでは、彼らはそれによって、カオス的な状況を切り分け、秩序を取り戻そうとしているのである。流動的な状況を分節しようとするのだ。こうして、ペキュシェは「種の皮をむいたり、ラベルを書いたり、豆を整理したりして、何時間も楽しく過ごした」(p.88)。「天気の子兆を知ろうとして、彼らはリュック・ホワードの分類法にしたがって、雲を研究した。彼らはたてがみのように伸びるものや、島に似たもの、雪山に見間違えそうなものを眺めつつ、乱雲と巻雲、層雲と積雲を区別しようとした」(p.88)。

しかしながら、彼らの試みは無駄に終わる。農業は完ぺきに失敗した。彼らは「すべての失敗は化学の知識がなかったせいだ」という理由をつけ、新たに化学を研究し始める。すなわち、新しい視点でカオスを整理しようと試みるのである。その後、ある学問に失敗するたびに、彼らは新しい分野に手を出し、結果的にさまざまな学問に取り組むことになる。それはすべて、それぞれの専門領域特有の視点から現実世界を把握し直し、カオスを分節しようとする試みである。彼らのやむことのない研究心の根底には、「掴みがたい現実を把握したい」という欲望があるのだ。そして、新しい学問に着手するたびに、彼らは分類作業を行う。二人は飽きもせず、さまざまな事象を種類に分け、名前をつけ、ラベルを張るのである。

たとえば、彼らは人間という掴みがたい現象を把握しようとして、人間精神を学び始める。そして、学者たちが精神をいくつもの種類に分類していることを知る。

魂には3つの機能がある。それ以上はない。感じる機能と、知る機能、欲する機能である。感じる機能は、身体的感受性と精神的感受性とに区別される。身体的感受性は当然、5つに分かれる。感覚器官によって導かれるからである。(p.305)

精神的感受性には4つのジャンルがあり、二つ目のジャンルは「精神的欲望」であるが、それ自身5つの種類に分かれる。4つ目のジャンル「愛情」の現象は、また別の2つの種類に分かれる。」(p.306)

人間の本性を人相から見抜くために、彼らは骨相学を学ぶが、頭蓋骨の形も様々に分類される。

あらゆる標本が存在した。お椀型の頭蓋骨や梨型、角砂糖型、四角いもの、伸びたもの、縮まったもの、平たいもの、牛のような顎を持つもの、鳥のような面のもの、豚の目をしたもの、等々。(p.377)

美術を研究している時には、「そもそも美とは何か」という問題にぶつかり、次のように美が分類されていることを知る。

数種類の美が存在する。たとえば、諸科学のなかの美では、幾何学は美しい。道徳における美では、ソクラテスの死が美しいことを否定できない。動物界における美。犬の美は、その嗅覚に存在する。その汚らしい癖からいって、豚は美しくはあり得ない。蛇も同様である。というのは、蛇はわれわれに卑劣な考えを呼び起こすからである。花や蝶や鳥は美しくあり得る。最後に、美の第一条件は、多様性の中の単一性で

ある。これが原則である。(p.219)

カオスの流れを分節して、最小の単位に分け、それぞれの単位の違いを明白にしつつ、一つ一つを名づける。彼らの分類作業は記号化作用と言い得る行為である。ブヴァールとペキュシェはカオスを記号の網の目によって分けることによって、世界を理解しようとするのである。いったん、切り分けると、カオスの曖昧模糊とした状況は失われる。空に浮かぶただの白いものに過ぎなかった雲のなかに、積雲や乱雲、巻雲などが現れるのである。人間の臓器も分節したとたん、心臓や肺、脾臓、肝臓等々が現れ、カオスは消失し、人間の内部は把握可能になるのである。

問題は、ブヴァールとペキュシェが分節に常に失敗することである。カオスは二人の分類作業を無効にしてしまう。ブヴァールは「花の芽と葉の芽を区別できずに、躊躇する」(p.96)。ひとつひとつの雲を記号化しようとする彼らの努力もむなしく、「名前を見つける前に、雲の形は変わってしまった」(p.88)。二人にとっては、「ラベルを張る前に、石の名前を知ることは、簡単な作業ではなかった」(p.149)。分類作業に失敗した結果、ブヴァールとペキュシェの家はチリやがらくたにまぎれ、カオスに飲み込まれてしまう。これは、村人たちが整理整頓された美しい家に暮らしていたり、伯爵の農場が機械化され、システムに従って経営されていたりするのと対照的である。村人たちは、カオスを分類しようとはしない。われわれの意見では、カオスが立ち現われるのは、逆説的にも、それを整理しようとする時なのである。

無力なのはブヴァールとペキュシェだけではない。学者たちも同様である。彼らも捕えがたいカオスを前にして、分節の有効性を否定せざるを得ない。

元素はメタロイドとメタルに区別されるが、この区別はまったく無効である、と著者は言う。
(p.116)

あるいは、「物質は酸性あるいは塩基性を帯びるが、

どちらであるかは状況に応じる」と学者は言う。酸性と塩基性という区別は無効にされてしまうのだ。また、種という「語は子孫が再生される個体の集まりをさす。しかし、別種に区分された動物が子供をつくる一方で、同種とされた動物がその能力を失ってしまっている」(p.141)。ここでも、種という分類単位が無効にされてしまう。ブヴァールとペキュシェの失敗は、学者の失敗でもあるのだ。世界のカオスと人間の秩序への努力を比べると、常に前者が勝利するのである。フローベールは様々な学問を取り上げ、その分類法の失敗を繰り返し描写する。それによって、学問の無力さを徹底して示しているのだ。ブヴァールとペキュシェの失敗は、カオスを安易に切り分けることに対するフローベール自身の警告なのである。

3. 規則

ブヴァールとペキュシェが試みるのは分類作業だけではない。彼らは、曖昧模糊とした現実の中に、規則を見出そうと試みる。われわれの意見では、分類が範疇作業 (paradigme) に関わるとするならば、規則は統辞行為 (syntagme) である。文章を作り上げる作業といってもよい。ある記号と記号をつなぎ合わせて、命題を作成する。問題はその文章が有効な意味を持つか、である。学者たちは自然や人間や芸術について規則を唱え、カオス的な状況の中に一片の秩序を見出そうとする。ブヴァールとペキュシェはそれらの規則を実際に確かめてみようとし、ことごとく失敗する。規則の明証性は得られないのである。

「[著者たちによれば] 木がよく育つためには、果実を実らせてはいけぬ。しかしながら、剪定せず、肥料もやらなかった木が、確かに大きくはないがよりおいしい実をつける。道理がないじゃないか! しかも、各種が特別の世話を必要とするだけでなく、各個体が気候や天候、いろんなことによって、特別な世話を要求する! どこに規則があるっていうんだ!」(p.109)

学者たちの意見とは逆に、二人が胃に出血させた鳩は、胃がいっぱいであれ空っぽであれ、同じ時を経て死んだ。(p.127)

著者によって記された症状は、彼らが見てきたものとは異なっていた。病気の名前についていえば、ラテン名だったり、ギリシャ名だったり、フランス名だったり、あらゆる言語のまぜこぜだった。(p.129)

規則そのものが、すでに例外を含んでいるものもある。たとえば、文法家によると、「主語は常に動詞に一致する、ただし主語が動詞に一致しない場合は除く」(p.217)。

*

ブヴァールとペキュシェは規則が有効でないことを次々に証明していく。そのうえ、彼らは、学者同士の意見の相違を発見する。それぞれの学者が異なる規則を提案しているのだ。カオスは無くなるどころか、矛盾しあう規則があふれ、さらなるカオス的狀況が現れるのである。こうして、「彼らは一冊の本を開き、また別の本へと移った。そして、多様な意見を前に、どうすればよいか分からなくなった」(p.88)。農業において、「泥灰岩の有効性に関しては、ピュヴィスは推薦し、ロレは否定した」(p.88)。医学においては、心臓の力について、「ボレリは8万リーヴルの重さを持ち上げられるとし、ケイルは8オンズしか持ち上げられないとした」(p.126)。

学者たちは、古代カルデア人やホメロスの世紀、ゾロアスターの存在やアッシリアの二つの帝国について、意見を異にしていた。(p.189)

われわれの語彙には、ラテン語のような定冠詞と不定冠詞があるだろうか？あると考える者もいれば、否と考える者もいる。(p.217)

文法家たちは意見を異にしている。ある者が美しいというところで、別の者たちは間違いを見

つける。彼らは規則を認めつつ、その結果を否定する。そして、結果を要求しつつ、規則を否定する。(p.217)

こうして、二人は規則に対する不信に陥っていく。「ある規則は、もしそれが偽のものだとしたら、重要ではない。が、その真実が正しいと証明するものは何もない」(p.307)、と彼らは叫ぶ。

「原則なんてものは、既知の知識を要約することしかしない。そして、われわれをそれら既知の概念に導いていく。が、それらこそまさに怪しい概念なのだ。」(p.319)

「どうやって真実を見分ければよいのか？もし証拠として挙げられた真実が、それら自身、証拠を必要とするなら、どうすればいいのか？」(p.356)

そして、ついには、簡単な足し算についても、もはや正しいのか分からなくなってしまふ。「人はある範囲内で、真実に到達できる」というブヴァールに対して、「どの真実？2足す2はいつも4なのか？」とペキュシェは問いただすのだ(p.308)。

彼らはこうして、あらゆる学問を否定することになる。それらはみな、カオスを消滅させるどころか、ますますカオス的あいまいさを増加させているからである。以下、二人の宣告である。

「栽培学なんて悪ふざけなのかも？」「農学と同様にね。」(p.99)

彼らはそこから、生理学は(古い言葉を借りれば)医学の小説本なのだと結論づけた。(p.127)

地質学はあまりにも欠陥がありすぎる！(p.158)

彼らはそこで、統辞論なんて気まぐれで、文法は錯覚だ、と結論付けた。(p.218)

「政治学なんて馬鹿らしい!」「あれは科学じゃない。」(p.258)

「だいいち、刑法は非理性的で原則を欠いていると僕は思う。」(p.402)

4. 方法的懐疑

われわれの意見では、ブヴァールとペキュシェは、様々な学問を通して、デカルトの方法を試していた。周知の通り、デカルトは誤謬をまねかないために守るべき方法を4つ挙げている。明証、分析、総合、枚挙である。

1. 明証的に真であると認めたもの以外、決して受け入れない事 (明証)
2. 考える問題を出来るだけ小さい部分にわけ事 (分析)
3. 最も単純なものから始めて複雑なものに達する事 (総合)
4. 何も見落とさなかったか、すべてを見直す事 (枚挙/吟味)

ブヴァールとペキュシェは分類作業を行いながら、彼らなりに、「分析」・「総合」・「枚挙」にならっていたと言ってよい。彼らは出来る限り、事象を小さい単位に分けようとし(分析)、単純なものから複雑なものへと進もうとし(総合)、すべてを数え上げようとしていた(枚挙)。また、彼らは規則を実際に確かめながら、「明証」を行っていた。さまざまな命題を自分たちで証明しようとしたのだ。そして、これらすべてに失敗したために、彼らは学問不信に陥り、何も信じられなくなるのである。すべては嘘であり、それにもかかわらず、その嘘に則って世界は構築されている。彼らの不信はデカルトの方法的懐疑の戯画だと言える。

ブヴァールとペキュシェ同様、デカルトもまた、すべてを疑っていく。肉体の感覚を疑い、自分が目覚めているという自覚を疑い(実は夢を見ているのかもしれない)、足し算の法則を疑い、神をも疑う

(「悪しき霊」かもしれない)。徹底した懐疑を推し進めると、世界は堅固さを失い、カオスに包まれてしまう。

そして、このいっさいを疑うという「膨張懐疑」の最中、彼はその懐疑の根底に横たわる自己の存在を発見する。懐疑は思惟の様態であるところから、ここに「私は考える、ゆえに私は在る je pense, donc je suis, cogito, ergo sum」なる命題が哲学の第一原理として立てられたのである⁶⁾。

コギトはカオスの中での唯一の支点である。「私が全ては偽であると考えている間、その私自身はなにものかでないといけない」。この「考えている私」だけは真とみなしうる。

コギト・エルゴ・スムは、方法的懐疑を経て「考える」度に成立する。そして、「我思う、故に我あり」という命題が明晰かつ判明に知られるものである事から、その条件を真理を判定する一般規則として立てて、「自己の精神に明晰かつ判明に認知されるところのものは真である」と設定する⁷⁾。

われわれの考えでは、ブヴァールとペキュシェがすべてを疑った後に見出すのは、コギトではなく、コピーである。彼らにとっては、カオス化した世界において、唯一堅固なものは、実際に話し使われている規則群である。それが正しいかどうかは問題にならない。正しい命題でないかもしれないが、それでも、それら規則の信ぴょう性に目をつぶって、ただ使用を続けていけば、世界は堅固なままである。村人たちの例がそれを証明している。村人たちは、足し算の法則を疑うことはなく、神の存在を当然のものとして受け止めている。その結果、村人たちにはカオスは立ち現れない。ブヴァールとペキュシェは、考える自分を基点にすることを止めたのである。彼らは明証することのできない規則群をただ鵜呑みにすることで、安定した世界を取り戻すことによる

やく成功するのである。こうして、小説の最後で、彼らは社会の規則をそのままコピーし始める。手に入った古紙に書かれていた文言を書き写し、様々な職業で用いられる言い回しの典型例をコピーし、保守派や革命派や宗教家や王政派のアジテーションを写す。と同時に、世間で話されているクリシェを集め、『紋切り型辞典』を執筆する。迷信と誤謬の集大成を作成するのだ。これらの迷信に則して世界（社会）は動いているのであり、これら紋切り型こそ世界の堅固さの元なのである。ブヴァールとペキュシェの探索の旅はここでようやく終わるのである。

結 び

『ブヴァールとペキュシェ』に表されたフローベールの哲学を、われわれは探ってきた。それはまず、カオスを分節しようとする学問がいかに無力であるかを示すことにあった。分類も規則探しも、世界の豊かさを無味乾燥な命題に還元するだけに終わった。次に、われわれの考えでは、カオス的な現実のなかで、疑問をいなくともなくうまく立ち回る村人たちのしたたかさを見せることも問題となっている。村人たちにとっては、コミュニティの総意が正誤の基準になった。コミュニティが正しいと認めれば、「自由」は最も大切な政治基盤の原則となったし、コミュニティが否定すれば、同じ「自由」の概念は危険なものとして破棄された。実際に、「自由」なる

ものが人間にとって最重要なのか、否かは議論されることはない。社会が指定する紋切り型の言い回しを使ってさえいれば、世界は溶解することはないのである。

フローベールはニヒリストである、と言われることがある。確かに、あらゆる学問の有効性を否定し、真実に至る道は存在しないとする『ブヴァールとペキュシェ』の物語は、作家の虚無感や悲しみを表現している。しかし、同時に、彼は村人たち（ブルジョワ）の強さにも気付いている。人間はカオスを前にして無力であるが、カオスを見ずに生きていく強さを備えている。われわれの考えでは、フローベールの「哲学」はこのブルジョワの強さに対する驚愕から始まっているのである。

注

- 1) それぞれ、1872年10月5日、1872年12月12日付の手紙。
- 2) 1870年1月15日付。
- 3) 1866年12月5日付。Gustave FLAUBERT, *Correspondance*, t.3, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, p.575.
- 4) 1850年9月4日付。Gustave FLAUBERT, *Correspondance*, t.1, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, p.679.
- 5) Gustave FLAUBERT, *Bouvard et Pécuchet*, folio, Galimard, p.86. 以下、『ブヴァールとペキュシェ』の引用にはこの版を用い、引用文の末にページ数を付す。
- 6) 『哲学辞典』、平凡社、1992年、「デカルト」の項、p.969.
- 7) *Ibid.*, p.969.